

絵本作家

加古里子

かこ さとし

1926(大正15)~2018(平成30)

今立郡国高村(現・越前市)生まれ

7歳まで越前市で過ごし、兄の進学を機に東京へ移り住む。太平洋戦争のさなか東京大学工学部に入学。終戦後、大学を卒業し、技術者として昭和電工に入社。1951年よりセツルメント活動(子ども会活動)に参加し、勤務のかたわら、子どもたちのために紙芝居や幻灯を作り始める。1959年、『だむのおじさんたち』(福音館書店)で絵本作家デビュー。以後、『だるまちゃん』シリーズ(福音館書店)、『からすのパンやさん』(偕成社)など親子で読み継がれる物語絵本や、『かわ』『宇宙』(いずれも福音館書店)などの身近な物事や自然、宇宙のしくみを分かりやすく伝える科学絵本を描き続け、その数は600作品以上にのぼる。



撮影：鈴木 藍

代表作



『だるまちゃんとてんぐちゃん』

(1967年／福音館書店)

友達のとてんぐちゃんを持っているうちわや下駄などをうらやましく思うだるまちゃんが、身の回りのものを使って考え工夫しながら欲しいものを手に入れていく物語。いろいろなものを欲しがると子どもの気持ちや、大人と子どもの思いのすれちがいなどが、ユーモアたっぷりに描かれます。

『からすのパンやさん』

(1973年／偕成社)

からすのおとうさん、おかあさんと4羽の子どもたちがおりなすパン屋の物語。店に並ぶ「はさみパン」「ピアノパン」などさまざまな形のパンや、からすたち一羽一羽の表情が魅力的な一冊。



絵本作家への道



セツルメントで紙芝居をする加古里子

子どもたちとの出会いとセツルメント活動

戦争が終わり大学に戻った加古里子は、演劇研究会に入り舞台装置や小道具を担当しました。地方公演の中で正直な反応をする観客の子どもたちに魅せられた加古は、子ども向けの脚本を書き始めます。1948年に東京大学を卒業した後も、働きながら児童劇を続けたいと思い、人形劇団の手伝いをする中で、東大セツルメントの子ども会活動に参加しました。

しかし、喜んでもらえるはずだと意気込んで作った紙芝居は子どもたちに全く見向きもされませんでした。そこで加古は、子どもたちをよく観察することで、彼らが何に関心を持ちどのように考えて行動するかを学び、次第に子どもたちに喜ばれ、受け入れられるようになっていきます。このセツルメントでの経験が絵本作家としての原点となり、生涯にわたり子どもたちの興味関心や個性を伸ばすための絵本を描きつづけました。

合わせて読みたい加古作品

絵本作家デビュー作

『だむのおじさんたち』（1959年／福音館書店）

山の中にダムができるまでの物語。自然と科学の調和とともに描かれる日本の働くお父さんたちの姿は、川崎の工場で働くセツルメントの子どもたちの父親の姿とも重なりました。



どろぼうがっこう



セツルメントで大人気！

『どろぼうがっこう』（1973年／偕成社）

セツルメントで作られた紙芝居が元になった作品。学位論文下書きの裏に黒一色で書いたもので、どろぼうたちのユニークな言動と、起承転結のあるストーリーで、セツルメントでは大人気の紙芝居となりました。

子どもたちへの思いをつづる

『未来のだるまちゃんへ』（2014年／文藝春秋）

長年にわたり数々の絵本を世に送り出してきた当時88歳の加古里子が、自然に囲まれた故郷・武生での暮らしや絵本作家としての半生を振り返りながら、敬愛してやまない子どもたちへの願いと、生きることのすばらしさを語ります。

